

障害者虐待防止演習 事業所職員向けQ&A

野沢和弘

(1) よく利用者(障害者)とプロレスごっこをして遊びます。技をかけると喜ぶのですが、これも虐待ですか？

- ①虐待だ
- ②本人が喜んでいる場合には問題ない
- ③力を抜いて痛くないようにすれば良い
- ④親の了解を得ればやっても良い
- ⑤施設長がOKと判断するのなら良い

解説

- 日常に近い、自分のこととして考えられるテーマで本音を引き出す⇒ ボクシングごっこ、プロレスごっこ、チャンバラごっこは多くの施設現場で日常的にある。
- 本音を引き出す(プロレスごっこを虐待とされたら支援なんかできない)(スキンシップは大事)と本音で思っている職員は多い。
- 無意識の自己正当化を考える(「力を抜いて技をかけている」「障害者は楽しそうにしている」)
- 免責事由を考える「親や施設長の了解」)

解説

- 「痛くない」？ それは技をかけられている側にしかわからない。
- 「楽しそう」？ それは職員の主観であって、本当に楽しいかどうかわからない。
- 職員の主観と障害者の感じ方が違うことを明確化する。
- 幼いころから被虐待、いじめ、コンプレックス～学び取った無力感。
- 施設における＜支援者－被支援者＞の固定関係。

解説

「私は施設にいたときに大好きな職員がいて、よくチャンバラごっこをして遊んでくれました。とても楽しかったけれど、新聞紙を丸めた刀で頭を叩かれることだけは嫌だった。痛くはないけれど辛くて仕方がなかった。でも、その職員さんは一生懸命遊んでくれているのだということはわかったので、その気持ちには応えたいと思い、必死に楽しい顔を作っていた。でも、いつも心の中では泣いていた」

(2) 「〇〇ちゃん」「△△くん」と呼ぶのはダメですか？これも虐待ですか？

- ①虐待だ
- ②虐待とは言えないが、好ましくない
- ③本人が嫌がらなければ良い
- ④親しみを込めた表現であれば良い
- ⑤親がOKであれば問題ない

解説

- グループワーク参加者ができるだけ抵抗感なく本音で話せるテーマ。
- 「くん」「ちゃん」付けはどこの現場にもある。誰でも話せる。
- 職員は一日に何度も「〇〇くん」「△△ちゃん」と呼ぶ。障害者は何度も呼ばれる。小さなことに見えるが重要なこと。
- 小さなことの中に虐待リスクや権利擁護のヒントが隠れている。

解説

- 呼称はそれぞれの育った環境の価値観や慣習と深く関係し、意外に根深い対立がある。
- 「あたりまえ」と自分で思っていることが、人によってあたりまえではないということに気づく。
- もしも自分が部下や下級生から「〇〇君」と呼ばれたらどうか？
- では、どうして障害者には年長でもクン・ちゃん付けが通ってしまうのか。
- クン・ちゃん付けに抵抗を感じない、障害者観のゆがみに目を向ける。

解説

- 「親しみを込めての呼称」「長年言っているので変えるとよそよそしく感じられる」。正当化の背景にプロ意識や専門性を軽んじる傾向はないか。
- 人間って言葉や身体感覚によって感情が微妙に影響されるとてもデリケートな存在。「〇〇さん」と声に出して呼ぶ習慣が障害者観を変えていく。
- どんなに良い職員だってカッとなるときはある。疲れていたり、障害者がなかなか指示を聞いてくれなかったりするとき、「〇〇さん」がクッション代わりになり、感情の高ぶりを鎮める一呼吸が生まれる。

(3) 「厳しく指導してやってください。悪いことをしたらぶってください」とお母さんが言います。あまり痛くないようにぶっているのですが、これも虐待でしょうか？

- ①虐待だ
- ②虐待とは言えないが、好ましくない
- ③痛くない程度なら良い
- ④悪いことをしたのなら叱るのは当然だ
- ⑤お母さんが言うのだからぶっても良い

解説

- 虐待かどうかを判定することよりも、①親や家族との関係 ②「悪いこと」とは何か ③「ぶつ」ことで悪いことは治るのか――を議論することが目的。
- ①家族の存在は職員にとって重要関心事。モンスターペアレンツ、要求の強い親への不満はよく聞かれるが、成人の障害者は「独立したひとりの人格」として見ることの確認、従順な親の屈折した心情に虐待が正当化されないことの確認をする。

解説

②「悪いこと」とは何か。「問題行動」とは誰にとって問題なのか。就寝時間に眠らない、食事に時間がかかる、施設の外へ無断で出ていきたがるー。

楽しく酒を飲んだり面白いテレビを見て夜更かしすることはある。就寝時間に寝てくれないと困るのは障害者本人ではなくて職員。集団管理をするのに一律の就寝時間を守ってくれた方が楽だから。

食事の時間は人それぞれ。体調によっても違う。食べるものによっても違う。食事時間を守らないと困るのは施設側、職員側。

「無断外出」。そもそもの環境の方に問題があるとなぜ思えないのか。いろんな好奇心をもったひとりの人間として当たり前な健全な欲求ではないか。

解説

③「ぶつ」ことで悪いことは治るのか？ 障害者支援のプロの仕事について議論する。

情緒的かつ道徳的なアプローチで行動は矯正されるのか。むしろストレスが行動障害をエスカレートさせるのではないか。

環境やコミュニケーションへの配慮、生活の楽しみを味わってもらうことで行動改善を図る。

親が「ぶってください」と言うから叩く、プロとして恥ずかしくないか。親がどう言おうが障害者に良い支援をして守るのがプロ。どうして親がそんなことを言うのかを考えるのがプロではないのか。

解説

「養育者の支援」の視点。

本気でわが子を「ぶってください」なんて言う親がいるだろうか。わが子を預けている相手に対する屈折した感情はどの親にもある。少しでも迷惑になったらどうしよう、ここを追い出されたら行き場がなくなる……そんなことを知らず知らずのうちに考えてしまう。だから先回りして「悪いことをしたらぶってください」と卑屈な態度を取る。そう思わなければ親自身が不安だから。親は「この子のために」といろんなことをやったり言ったりするが、この子のためにとやってやっていることの何割かは、親が自分自身の安心感にしがみついて、不安な思いを必死に捨てたくてやっている。

(4) ざわざわしているとパニックになり他の利用者に噛みつく人がいます。力で押さえて止めているのですが、これも虐待ですか

①虐待だ

②虐待ではないが、好ましくはない

③身体拘束の3要件(逼迫性・非代替性・一時性)を満たしていると施設長が判断すれば良い

④ほかの利用者が傷つかないように押さえるのは正当防衛だ

⑤記録に残しておけば、押さえることは容認される

(5) 乱暴な障害者に噛みつかれたり、たたかれたりします。人手も足りず、疲れ切ってしまい、思わず叩いてしまいました。施設長から「虐待だ」と指摘され停職処分を受けたのですが、もっとひどいことをしている職員もいる。私だけ損するのは納得できません。

- ①処分されるのは仕方がない
- ②責任は法人や管理者にあるのだから、処分は不適當
- ③叩いた行為を記録に残し、行政に見せて了承されれば許される
- ④悪いのは障害者、職員が処分されるのはおかしい
- ⑤親に報告して納得してもらえば処分は必要ない

(6) つい、カッとなって障害者を殴りたい衝動にかられたことがある。私は福祉職員として失格でしょうか？

- ①失格だ
- ②失格ではないが、障害者支援には向いてない
- ③衝動にかられても実際に殴らなければ問題ない
- ④誰しもカッとなることはあり、そういう危うさを自覚することが大事だ
- ⑤家族だってカッとなったり殴ったりすることがあるのだから、職員だって仕方がない

何を伝えるのか

- 人の価値観は簡単には変わらない
- 自分と違う考えがあるということに気づくことはできる
- どうして違う考えなのかを考える
- もしかしたら自分は間違っているのではないかという恐れ、衝撃、焦燥を感じる
- 他人から指摘されると認めたくないが、自己批判はできる
- 思考が血肉となって初めて価値観が変わる

大切なこと

- 日常のささいなことの中に重要な課題が潜んでいることに気づく
- 多様な考え方があることを知る
- 複眼的な視点で考える癖をつける
- 変わっていける柔軟性、謙虚さを身につける
- 障害者の気持ちに寄り添うことのむずかしさを知る
- 障害者支援の奥の深さを知る
- 仕事へのやりがいやプライドを感じられる